



連載 I  
当財団専門委員  
私の研究と観光  
第 5 回

# 歴史を活かしたまちづくりと観光

東京大学大学院工学系研究科 教授 西村 幸夫

## 日本の町並み保存運動が研究の出発点

専門は何ですか、と聞かれた時は「都市計画」と答えることにしている。所属している都市工学科はまさに都市計画の専門家教育機関として日本初の組織であり、都市計画が専門だということに相応しいところである。

しかし、当初から私は都市計画に対して違和感を抱いていた。都市計画一般というより、私が学生時代を過ごした1970年代当時、教えられていた都市計画に対して違和感を抱いていたのである。

当時の都市計画とは、ひとことで言うと、都市の古くさい過去を否定し、輝かしい未来をもたらし計画技法と考えられていたのであるが、私にはどうしても身の回りの生活の記憶や過去とのつながりを消していくような計画が良いものとは思えなかった。

その頃出会ったのが、当時黎明期にあった町並み保存運動だった。まちの歴史を活かすようなまちづくりを進めることによってまちに元氣

を取り戻す運動である。そこに都市計画の新しい可能性を見たのである。

いや、正直に言うと、日本の古い町並みの魅力にとり憑かれ、日本各地の集落町並み発見の旅に仲間たちと出かけたかっただけなのかもしれない。ただ、訪れた各地で魅力的な景観だけでなく、まちづくりの魅力的なリーダー達に出会い、勝手に自分にとっての先生だと見定めて、研究を始めたのである。その意味では、各地の歴史的町並みがそのまま青空教室だった。

## 「観光まちづくり」へ

こうして町並み保存運動を都市計画的にバックアップするということを進めていくうちに、物理的に歴史的な建物や通りを保全できたとしても、そこが空き家ばかりになってしまいうのでは意味がないという事例に何度となく突き当たるようになってきた。モノの保存だけではまちはなかなか救われないのである。

もちろん結果として保全された町並みが観光

地となって地域経済を潤すという事例は以前からあったが、まちづくりのリーダー達は観光を目的化することを極端に嫌っていた。まちづくりは生活環境を守り、今後に活かすためにボランティアでおこなうものであって、ビジネスのために観光を目的としておこなうものではない、自分たちのためにまちづくりをおこなうのであって、外部からの来訪者のためにまちづくりをやるのではないという論理である。

たしかにその主張自体は正しいが、どのまちにも必ず過去からの経緯というものがあちまちまちづくりがフラットな現場から出発しているものであるとも限らない。また、町並み保存が一定の成果を挙げると、必然的に来訪者が増えてくるが、その先のマネジメントはまちづくりとは無縁だとも言えないものである。

こうして私は次第に、歴史を活かしたまちづくりと観光との接点に研究上も必然的に接近して行くことになった。さらに言うと、まちの魅力を再発見して、まちづくりを進めることは、

歴史を活かすことにとどまらず、新しいネットワークづくりやコトおこしにも広がっていくものとなっていた。

そのひとつの発現が「観光まちづくり」という発想だった。

まちづくりの側が観光を次第に受容していくと同時に、観光の側も個々の競争を乗り越えてまちづくりへ接近してきているという実感がこの言葉を生み出す契機となった。1990年代後半のことである。「観光まちづくり」の発想を議論している場には、当時、運輸省観光部企画課長だった本保芳明氏（現首都大学東京教授）や湯布院の桑野和泉さんなどがいた。

私自身は、都市を経営するという視点を内部化することによって、モノ中心の都市計画を一回りおおきくしていきたいと考えていた。並行して、「都市保全計画」という計画技術あるいは学問分野とも言えるものを確立しようと努力していた。これが当時の私のスタンスだった。

### 『観光まちづくり』の編集・執筆

こうしたなか、財団法人日本交通公社研究調査部（当時）のメンバーの協力を得て、「観光まちづくり」という用語を初めて使った書籍『観光まちづくり——まち自慢からはじまる地域マネジメント』を2009年に出版することとなった。

この本は、「まちづくりから観光に至る道筋」を私の研究室を中心としたメンバーが事例と共に

を紹介し、同時に「観光からまちづくりに至る事例」を梅川智也研究調査部長（当時）をはじめとして財団法人日本交通公社のスタッフが執筆するという協働作業で進められた。

協働作業は有意義であったし、出版された本もそれなりに社会に受け入れられたと言えるが、両チームの意図が100%一致するというわけにはいかなかった。その意味で実験的な書物であったとも言える。

その理由は、たとえば、観光の専門家はえてして「旅行商品」という言い方をするが、まちづくりの対象として当該のまちを見ている我々にとつて、そのまちを商品のひとつと考える見方には到底馴染めない、といった心情的な立場の違いがあったからである。

たしかに冷静に考えると、いかにまちづくりを主体的におこなっていたとしても、来訪者側からすると、来訪先として考えられる数多くの選択肢のうちのひとつであり、それが旅行のなかである種のパッケージ化がされるわけなので、商品というような客観化は当然のこととも言える。それは分かっているが、まちの側からのごとを考える身にはそれはとても受け入れがたい表現だった。

それは「着地型」というような表現にも当てはまる。着地するのは来訪者であって、けっして地元住民ではないからだ。まちの側から見ると、「地元発意型」とでも言ってほしいものである。

### 現在のインバウンド観光に直面して

こうして私は町並み保存運動から次第に観光へ接近していくこととなったが、近年の圧倒的なインバウンド観光の圧力は、これまでの状況をおおきく変えそうな勢いである。観光の経済的位置づけも以前にも増して大きくなり、観光がまちづくりの一部となることに異論を差し挟む人は以前よりはるかに少なくなってきた。本の副題とした「まち自慢からはじまる地域マネジメント」のまち自慢もインバウンドの目から見たまちの再発見まで広がりがつつある。アウトリーチや地域の将来戦略も国際化が著しい。

新しい研究の基盤がうまれつつあるということを目撃している。

（にしむら ゆきお）



西村 幸夫（にしむら ゆきお）

1952年福岡県生まれ。東京大学都市工学科卒業、同大学院修了。明治大学助手、東京大学助教授を経て、1996年より東京大学教授。主な著書に『図説 都市空間の構想力』（東京大学都市デザイン研究室編、学芸出版社、2015年）、『まちの見た方・調べ方』（西村幸夫・野澤康編、朝倉書店、2010年）、『観光まちづくり』（西村幸夫編・（財）日本交通公社編集協力、学芸出版社、2009年）など。